

12月14日（日）主日礼拝レジュメ

「すべての者を導かれる神」 マタイの福音書2章1～12節

「東方の博士たち」とは誰かについては諸説ある。恐らく昔のペルシャか、バビロンのあった所ではないか。そして博士たちは、「占星術師」だろう。彼らは、身分の高い人たちで、星の研究者として星の動きを観察することで世の動きを判断していた。特に博士たちは、旧約聖書の知識もあって、特別な星の出現が、ユダヤ人の王の誕生を告げ知らせるものだと確信したのである。

ここでマタイは「見よ。」と言っているが、異邦人がイエス様のもとへ導かれたことは驚きだった。まさにマタイにとってはこの東方の博士たちがイエス様のもとへ導かれたというのは特筆すべきことと考えたのではないか。クリスマスの出来事はユダヤ人のためだけでなく、全人類のためのすばらしい喜びの知らせだということを確かにここは証している。先週1章21節「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」のみことばから異邦人もユダヤ人もイエスキリストを通して罪からの救いが必要。そういう意味で異邦人である東方の博士たちも導かれてきたことにも意味がある。

彼らをイエス様のもとへ導いたのは神ご自身。2節で彼らは「私たちは、その方の星が昇るのを見たので、礼拝するために来ました。」と言う。ここで博士たちを導いた星について、古くからさまざまな説明がなされた。その背後には、神様が天体の動きに働きかけ、博士たちをユダヤへと導いたということ。私はここに神の多いなる導きを感じる。神はすべてのものをお造りになり、すべてのものを支配しておられる。それら一つ一つを用いて神はすべての人々をお導きになる。私たちもまた神の不思議な導きによってこの東方の博士たちのようにイエス様のもとへ導かれた。

9節「すると見よ。かつて昇るのを見たあの星が、彼らの先に立って進み、ついに幼子のいるところまで来て、その上にとどまった。」とある。彼らは、それを見て、この上もなく喜んだ。そして幼子イエスを礼拝し、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげた。当時は、とても高価なものでしたが、惜しげもなくイエス様にささげた。私たちも、イエスに導かれたことを喜び、イエスを主としてひれ伏して、礼拝し、そしてイエスに惜しまずすべてをささげ、自らをもささげる者へと変えられた。そして、神の導きを信じ、さまざまなかたちで神が導かれることを信じて歩んでいる。もはや運命とか偶然に左右されない人生を生きている。もちろん神を信じたからといって将来のことがわかるようにされるわけではない。その中で不安になることがある。耐えられないような悲しいことが起これば、なぜ私にこのようなことがと思うことがある。しかし私たちは神を信じ、神にすべてをゆだね、心安らかにいることができるようにされる。

10節「この上もなく喜んだ」とあります。神がみこころによって導かれる中で、イエスキリストの出会いを通して、私たちも喜びを経験することができる。なぜか。そこに私たちは神の愛を見、神の愛を知ることができるから。どんな導きの中にあっても、確かに御子イエスキリストをこの地上に遣わし、私たちの罪のために十字架にかけられるほどに私のことを愛してくださった、その愛を知ることにより、私たちは愛される喜びに満たされる。そして、博士たちが「母マリアとともにいる幼子を見、ひれ伏して礼拝した」ように、私たちはこのイエス様にひれ伏して礼拝し、すべてをおささげし、そして、私たちは自らをこの方の前にささげて歩む。そして、イエス様が再臨される時に、私たちはともに心からほふられた小羊なるイエス様をほめたたえるが、その時がこの上もない喜びの時であり、その時に私たちは、こんな小さな、取るに足らない、罪人の私をも顧みてくださり、愛してくださったことをおぼえつつ、感謝をささげる。